

<書評論文>

コミュニティへの容赦ない回帰と資本主義

Miranda Joseph,
Against the Romance of Community.
 (University of Minnesota Press, 2002)

北 島 義 和

1 はじめに

コミュニティ——それはわれわれに保護、団結、無私、質の高い生活といったものを思い起こさせる甘美な響きを持っている。とりわけ、社会の周縁に置かれた人々は、このコミュニティを引き合いに出しながら、自分たちの共通の本質、経験、抑圧、政治的目標を掲げ、構造的な抑圧に対してアイデンティティ・ポリティクスを用いた抵抗をおこなってきた。しかしながら、コミュニティという想像された空間を展開することにともなうさまざまな不都合が、近年の多くの研究において指摘されてきている。これらの研究は、コミュニティが持つ統制的、排他的な性格や、コミュニティ内に存在する差異や不平等に対する無視といったものを指摘することによって、構造的弱者は、自分たちが反対しようとしている抑圧的实践そのものを、自らの抵抗の内部に組み入れてしまっていることを明らかにしたのである。

本書の著者であるミランダ・ジョセフは女性学の研究者であり、ゲイの劇場におけるフィールドワークを中心にして、多彩な研究活動をおこなっている。自らのフィールドワークにおいて、ゲイコミュニティの先に述べたような抑圧的側面を目撃したジョセフは、専門領域であるゲイ研究を足場にしながらも、本書ではコミュニティという問題枠に取り組んでいる。

コミュニティの抑圧性を指摘する多くの研究者たちが、抵抗のための代替的な集合性をさまざまに模索しているのに対して、ジョセフは、そのような研究がコミュニティという支配的言説あるいは実践の並外れた力や容赦ない持続性を正しく評価し損ねていると指摘

する。コミュニティがどうあるべきなのかというよりは、むしろコミュニティがどのようなにつくりだされ、消費されるのかが、本書におけるジョセフの中心的な関心事である。

次節でも述べることだが、コミュニティを封建的なものとして退けるにせよ、抵抗の場所として賞賛するにせよ、それは近代を定義する他者となるために、すでに近代的実践の内側にあるものである。近代という根本的実践、その中でもとりわけ資本主義が、コミュニティに依拠し、かつそれをつくりだしているという、コミュニティと資本主義の共謀関係を、ジョセフは本書で論じている。

本書は5章構成である。上記のようなジョセフの問題意識を提示したイントロダクションに続き、第1章ではK・マルクスの価値理論に依拠しながら、資本主義のコミュニティへの依存を描いている。第2章では、コミュニティを含む社会編成における、資本主義の力を描いている。3、4、5章は、これらの議論を踏まえたケーススタディとなっている。第3章では、ジョセフがフィールドワークをおこなったゲイの劇場についてのエスノグラフィ資料などをもとに、NPOについて論じている。第4章では、全米芸術基金（NEA）をめぐる論争を題材に、ゲイコミュニティとキリスト教コミュニティの二項対立を脱構築しつつ、国民と国家の関係の再調整について論じている。第5章では、類比によるさまざまな特殊性の資本への包含を表現している物語として、グローバリゼーションという言説について検討を行い、そして最後にまとめとしてエピローグが添えられている。

本稿では、1、2章で述べられているジョセフの基本的なパースペクティブについて概観し、それに基づいたケーススタディをひとつ紹介した後、そのパースペクティブについて若干の批判的な検討を行っていききたい。

2 コミュニティのロマン的言説に対する批判

コミュニティは資本主義社会より時間的に先行し、疎外・官僚制化・合理化といったものにとらわれているわれわれがノスタルジックにあこがれるような失われた過去の中に存在するものであるという考え方を、ジョセフはコミュニティのロマン的言説と呼ぶ。つまり、そこにおいては、コミュニティは近代や資本主義を定義する他者として位置づけられているのである。この言説は、コミュニティを自然的で地域的で境界決定的な特殊、そして一方資本をあらゆる境界を越えて経済価値によってすべてのモノや人を同等にする抽象として描いている。そして、コミュニティと資本というこの二項対立によって、コミュニティという領域が資本主義から自立的なものであり、かつそれぞれのコミュニティも互いに別個で自立したものであるという見解が含意されている。

コミュニティが資本主義社会によって破壊され、取って代わられてきたのだというこのような時間的物語は、古典から現在に至るまでの多くの社会学理論の中に広く見られるものである。そして、これらの社会学理論は、コミュニティを復活させることによって、現在の資本主義をいわば和らげ、貧困や犯罪などコミュニティの危機として受けとめられているような問題を解決しようと主張するのである。そこにおいては、コミュニティは資本主義を補完するものとしてあらわれており、資本主義の釣り合いをとったり、資本主義を人間化したりするものとして捉えられている。

しかしながら、これらの理論はコミュニティを独立したものとして扱うことで、その背景となる政治的・経済的条件から切り離してしまっている。多文化主義などをめぐる議論に言及しながらジョセフは、このようなロマン的言説は、決定的な権力差を持つ諸集団を同等なものとして扱うことにつながり、コミュニティ内あるいはコミュニティ間に存在する社会的ヒエラルキー（人種・階級・ジェンダー）を正当化し、それに依拠した資本主義の搾取を可能にしているのだと主張する。

3 コミュニティの資本に対する代補的關係

そのようなロマン的言説の補完的な見解に反対し、ジョセフはJ・デリダに依拠しながら、コミュニティは資本に対して代補的關係にあるのだと主張する。コミュニティと資本はそれぞれ完結的ではあるが、ともに内的に一貫しておらず、外的にもつながりを有している。それゆえ、コミュニティと資本は相互依存的な構造としてあらわれてくる。これはコミュニティ同士の関係についても同様である。しかしながら、コミュニティと資本はお互いの非連続性も同時に維持しているのであり、両者は単に完全で安定したシステムの形成のためにお互いに補完しているというよりは、むしろダイナミックなプロセスの中でお互いに超越しあったり、置き換わったりしているのである。

ジョセフは、マルクスの価値理論が、特殊と抽象の間の関係を組織化するなかで、コミュニティの資本に対する代補的關係をきわめて詳細に描いているとする。マルクスの価値理論においては、商品の二つの異なる秩序として、価値と使用価値が提示されている。そして、使用価値つまり商品の特殊性や具体性は、交換の時点においては控除されて、抽象化された価値の物質的運び手になるとされる。しかしながら、いかなる商品も有用性がなければ価値（つまり交換可能なもの）にはなりえない。そしてこの有用性とは、社会的・歴史的に決定されたものであるとジョセフは言う。マルクスの価値理論のこのような解釈は、歴史的・社会的に決定された使用価値の特殊性が、特殊な社会関係や価値意識を含む

ものであり、それは抽象的価値の起動を代補して、その循環を可能にしているのだということを示唆している。つまり、資本主義を作用させているこの抽象と特殊の全体的な弁証法は、コミュニティという特殊な社会編成も批判の対象となりうることを示しているのである。ただ、特殊で拘束的なコミュニティから、資本主義という疎外されてはいるが普遍的な関係へ、そしてさらには共産主義へという歴史的議論によって、マルクスはこのような価値理論を台無しにしまっているようだとジョセフは言う。よって、コミュニティと資本の関係の描写のためには、マルクスの構造的説明を歴史的説明から分離してやる必要があるともジョセフは主張する。

また、マルクスの価値と使用価値の関係、つまり資本とコミュニティの関係についての議論は、両者の共謀だけを第一に強調しているわけではないとジョセフは言う。マルクスは、価値と使用価値の結合と交換の失敗（たとえばある人によって役に立つものでも、それが役に立たない人には購入されない）について述べることで、両者を背反的なものとしても描いている。価値は使用価値によって具体化することなしには何もなしえない。だが、価値の運動を可能にするこの具体化は、しばしば価値を圧迫し、時間や空間を通じた価値の運動を妨害するのである。

4 生産と消費の遂行

また、別のところでジョセフは、特に現代の社会運動の中で見られるような、アイデンティティを基盤にしたコミュニティの編成は、資本主義における生産の遂行を通じて構成されるのだということも主張する。この主張においても、ジョセフはマルクスのテキストに依拠している。

マルクスは、個々の主体は客体生産の産物であると主張する。つまり個人のアイデンティティや集合性や社会関係は、生産を通じて遂行的に決定されるのである（ただしこの遂行性は、資本家と労働者という二極的なものではなくきわめて多様であるとジョセフは言う）。このようにしてマルクスは、生産されているものは意味、すなわち社会的価値であることを明らかにしたのである。

しかし、マルクスの分析は経済領域の商品生産に限定したものであった。このためジョセフは、フェミニストや消費社会論者を参照しながら、生産をより広い意味で用いる。一方でジョセフは、ジェンダー役割を決定するような非市場的活動、とりわけ再生産をも生産とみなすフェミニズムの議論に依拠して、広い範囲の私的・社会的活動も生産の範疇に含める（このような社会的生産は、資本蓄積の場として剰余価値生産という狭義の生産に

フィードバックするものでもあるが)。また一方でジョセフは、消費社会論者を引用しつつ、商品の言説性、すなわち商品の購入が地位やアイデンティティを付与するという側面にも焦点を当てて、消費労働も生産に含めている。

また、このような多様な生産を通じてつくられたコミュニティを含む社会編成は、物神性のモデルで分析することができる。つまり、このようにしてつくられたコミュニティは、それを作り出した主体からは独立した、主体を超越する有機的存在であると思われるようになるのである。このためエスニシティや、国家や、アイデンティティを基盤にしたコミュニティ編成は、しばしば疎外された生産領域の代替物を提供するものとして表現されるのである。言い換えれば、コミュニティはそれが位置している、より大きな社会的生産関係とは独立したものとして理解されてしまうのである。

また、ジョセフはJ・バトラーに依拠しながら、そのような生産の遂行性は、言説に拘束された、遡及構成的なものであり、主体の自由行為ではないことも指摘している。ただ、革新の可能性が生じるのは、規範の生産的再制定においてであるとバトラーは述べている。つまりこの生産は同じものの再生産というより、むしろP・ブルデューの言うハビトゥスのようなものであり、そこには物事が別の方法で進む余地も存在する。この多次元性は、対立や革新や変化がしばしば社会関係の生産の特色となることの文脈をつくっている。こうして、ジョセフは生産様式に押し付けられた拘束を認識しながらも、社会変動への機会は生産のうちに存在しているのだと主張する。

5 ケーススタディ：ゲイコミュニティにおける代補的ダイナミクス

ここまで述べてきたようなパースペクティブを基盤にして、ジョセフは本書のいたるところできわめて多様なケーススタディを展開している。しかしながら、ここでは第3章のNPOについての議論を紹介するにとどめておこう。

NPOはコミュニティと重要な関係にあるとジョセフは言う。NPOはしばしば政治的なコミュニティの代表とされ、コミュニティのために発言することが求められる。つまりNPOはコミュニティの換喩となるのである。こうしてロマン的物語のなかでは、NPOは、かつては隣人の間でインフォーマルに起こっていた共同的行動のフォーマルな場所として想像される。そして同時に、NPOは資本との関係を通じて定義もされ、コミュニティが資本主義を補完する制度的形態として位置づけられているのである。

まずジョセフは、そもそもNPOは草の根的なものであるというよりも、むしろ資本主義のヘゲモニー建設の過程において、国家や資本家によって生み出されたり、支援されてき

たりしたものであるという見解を支持する。そして19世紀以降は、NPOはとりわけ共産主義のような反資本主義に対抗するために利用されてきた。国際通貨基金や世界銀行のような発展機構による、近年のNPOの奨励からもわかるように、それは資本主義が自身の危機と取り組むという、発展の歴史そのものの結果なのである。そこにおいては、NPOはヘゲモニー装置として機能し、資本ではないものに対する願望、すなわちコミュニティへの願望を、資本主義への願望と結びつけているのだ。

また一方でジョセフは、NPOは遂行的生産の場であり、社会編成をつくりだすものであるとする。つまり、NPOが既成のコミュニティの表現であるとは考えないのである。だが、こうしてつくりだされた主体や社会編成は、直接的に資本の循環を容易にするだけではない。資本主義のためのヘゲモニー装置としてのNPOの側面は重要ではあるが、それに言及するだけでは完全な説明とはならない。こうしてジョセフは、自らがフィールドワークをおこなったTheatre RhinocerosというNPOのゲイの劇場を題材に、NPOへの参与によってつくりだされたコミュニティと、資本主義の間の代補的關係について論じるのである。

この劇場はゲイによるゲイのための作品を制作することで、ゲイコミュニティを形成している。劇場に関わるゲイの人々は、この劇場への参与によって主体性やアイデンティティを形成する代わりに、いわば贈与交換というかたちでコミュニティへの貢献を行う。特に劇場のスタッフたちは、ゲイアイデンティティを題材にするような作品を制作することで貢献を行っている。彼らは、この劇場をゲイコミュニティの反映であるとみなしており、自分たちや他者（ここでは「主流」と呼ばれる）に対してそのコミュニティを描くと同時に、そのコミュニティを形づくり、定義し、導くのを手助けするものでもあるとみなしている。

だが一方で、スタッフたちはこの劇場が単なる「コミュニティ劇場」にとどまるのではなく、主流も認めるだけの価値を持つ作品がつかれるようにするために、劇場を職業的なものにしたいとも感じている。だが、この職業意識の結果である作品の良質さは、コミュニティ規範やコミュニティに対する忠誠の放棄につながる可能性がある。というのは、この劇場の作品は、同性愛のテーマしか中心的に取り上げないという評価があるからだ。

スタッフたちは、この共同性と職業意識の間の対立を恐れている。そのためスタッフたちは、主流の芸術との同等性を得るためのプロジェクトを、コミュニティ義務を動員することによって、解決しようとするのである。つまり、ここにおいてはコミュニティと資本主義、さらに言えば贈与交換と経済的循環（金銭や芸術的評価のような抽象化された同等物の交換）は、互いに排他的あるいは補完的な関係にあるというよりも、むしろ互いに代補的なものとしてあらわれてきている。すなわち、両者は相互に依拠しながらも、同時に

互いにとって代わろうとしているのである。

主流の世界に参加して、それと同等な作品をつくることは、ゲイ以外のテーマにも取り組んで、コミュニティを多様化することを必要とする。しかしながら、それは特殊化されたコミュニティや、ゲイアイデンティティという共通の核をつくろうとする試みの土台を崩してしまいかねない。

だが他方で、コミュニティ義務を動員することは、コミュニティの保守性を高め、資本の循環、言い換えれば資本主義のヘゲモニー建設の抵抗となりかねないものである。しかしジョセフは、この作用もまた、劇場の人々のなかにあるコミュニティのロマン的言説によるものであるとみなしている。つまりジョセフは、直接的には語っていないが、コミュニティのロマン的言説には、2節で述べたような資本主義を可能にしている側面とは逆の側面もあり（結局はこれもコミュニティ内の多様性を抑圧することになりかねないのだが）、この言説を両義的な性質を持つものとみなしていると考えるのが適当であろう。

6 おわりに

エピローグのなかでジョセフは、資本から自立したものとしてのコミュニティという言説が資本の搾取を可能にしていると主張することで、その限りにおいて、ローカルなあるいはアイデンティティを基盤にしたコミュニティへの投資や多様性の賛美という抵抗戦略は不適切なものであるとする（ただ、この指摘はいささか奇妙にも思われる。なぜなら前節でも明らかなように、ジョセフはコミュニティ言説の反資本主義的效果を認めているような節もあるからだ）。また一方で、ジョセフはコミュニティと資本の間の関係を代補的なものとして描き、資本主義的な生産と消費を遂行的なものとして描くなかで、集合行為への生産的参与は、資本主義を容易にするだけでなく、資本の流れへの抵抗として組織化される可能性についても言及している。そして、コミュニティを構成するように資本主義を容赦なく作用させているのはこの潜在的な破壊力であると言う。だがジョセフは、この資本の矛盾した領域を潜在的抵抗の場として、われわれは自分たちが不可避に従事している個人的・制度的実践を評価して、政治的目標や戦略や行為を再形成せねばならないと述べるにとどまっており、この資本とコミュニティの弁証法的な抑圧に対する具体的な抵抗のかたちは見出せないでいる。

本書の思想的位置づけは、1980年代以降おもに英米圏にあらわれた、コミュニティが個人の生に対して持つ構成的価値を重視した政治・倫理思想であるコミュニタリアニズムに対するアンチテーゼであると考えられる。とくに現代アメリカにおいて過度の個人主義に

よって家族や地域社会が崩壊の危機に瀕しているという社会的感覚は、コミュニタリアニズムが広く受け入れられる背景となった。本書の意義は、そのようなコミュニタリアニズムによるコミュニティの称揚やコミュニティの無謬性に反対して、コミュニティという文化的なもの、資本主義という経済的なもののあいだの共謀を論じていることにある。ジョセフは、この観点を導入することで、たとえば消費を通じてゲイコミュニティを構成する際の搾取工場への依拠に気づくことができると述べ、世界の貿易政策に反対する運動へのゲイの参加によって、ゲイのコミュニティやアイデンティティを変化させ、違ったように組織化することができるとしている。しかしながら、ジョセフ自身も認めているように、このような試みは資本の流れに純粹に反対するものではないし、アイデンティティやコミュニティの完全な放棄に関わるものでもない。

だが、より重要であるのは、ジョセフがこのようなモデルを建て、現状はいかんともしがたいものであるから変革せねばならないという立場をとることによって、構造的弱者の現在のローカルな実践の意義（先に述べたようにローカルという場所が抵抗の場になりうることはジョセフも認めている）をほとんど未分析のままにしまっていることである。これではわれわれ研究者は、いわば人々を啓蒙する役割を持ったエリートとしてあらわれてきてしまい、それこそそのような営為の遂行的生産として学者と一般人という階級差を生み出しかねない。ジョセフ自身が指摘しているようにローカルな実践を楽観的に擁護することは行き過ぎであるにしても、ともに支配からの抵抗を目指すものとして同じ地平に立つためには、現在のローカルな実践の抵抗性にも注意を払い続ける必要がある。

たとえば、ジョセフはコミュニティのロマン的言説を現在おこっている抑圧の一つの元凶として、置換あるいは廃棄することを目指しているように思われるが、それは資本主義や不平等を形作っていると同時に、構造的弱者が目下の抑圧的状况をのりきるための一つの生に対する意味づけの技法、納得の形式でもある。それを軽視して単に置換や廃棄のみを主張するならば、このような人々の当面の前進の手段を簡単に奪ってしまうことになる。ローカルな実践の両義性を見据えて、人々が現在おこなっている行為の意義の多面性を認識することは、現実のより適切な認識のためには決して無駄な作業ではないはずだ。

参考文献

- 青木孝平, 2002, 『コミュニタリアニズムへ——家族・私的所有・国家の社会哲学』社会評論社。
 King, Anthony D. ed., 1991, *Culture, Globalization and the World-System: Contemporary Conditions for the Representation of Identity*, Binghamton: State University of New York (=1999, 山中弘・安藤充・保呂篤彦訳『文化とグローバル化——現代社会とアイデンティティ表現』玉川

大学出版部.)

田辺繁治, 2003, 『生き方の人類学』講談社.

田辺繁治・松田素二編, 2002, 『日常実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社.

(きたじま よしかず・修士課程)